

平成二十三年度 第五回大阪護國神社

英靈慰靈顕彰勉強会

平成二十三年九月十八日（日）  
午後一時～午後四時三十五分  
於・住之江会館

講演 「伝統に基づいた日本復興のとき」

明治神宮至誠館館長 荒谷 卓

こんにちは。荒谷です。この講演に先立ち、大阪護國神社に参拝させて戴きました。まことに気の引き締まる思いでここに立たせて戴いております。

私がおります明治神宮の至誠館では毎年、海外で武道の講習会を開催しています。明治神宮の武道場に来る外国人が増え、それぞれの地で至誠館の武道の心を広めたいという要望に応えて、主にヨーロッパで武道を通じて日本人の精神を紹介しているのです。今年はフランスのドルドーニュ地方のペリグー市で開催しました。ヨーロッパを中心に十カ国の道場から参加がありました。が、残り人数が多いと「精神」を伝えることが難しいので、百名に限定して、しかも指導に当たる方に参加して戴きました。

その講習会の丁度中日に、ドルドーニュ地方の県知事が講習会の研修に見えました。この方はフランス政府の青少年スポーツ振興の政府代表も務めており、武道を見学された後の懇親の場で、三月十一日の東日本大震災に際して日本人が見せた勇氣と秩序に敬意を表されるとともに、「何故、日本人はあのような行動がとれるのか。その背景には武道の精神があるのではないか」と尋ねられました。さらに「是非とも武道の精神的な背景を学んで、それを適切なかたちでフランスの青少年に普及したい」と話されました。

フランスの義務教育では、日本の武道が必修科目になっています。日本では武道をする人が減少傾向にあります。フランスでは非常に盛んです。例えば、至誠館で昨年初めて開催された世界弓道大会で優勝したのはフランスでした。フランスの武道家達は技術のみならず精神的にも優れており、武道の精神を積極的に学ぼうという姿勢が礼法にも表れ、大変見事でした。

ペリグーで開催した武道講習会のテーマは、「オリジン（原点・もともと）」というものでした。これは、講習会を企画したフランス人が設定したのですが、ペリグーの地はラスコーの壁画があるところで、彼等は自分達の原点を探求するため、敢えてこの地を選んだのだそうです。

ヨーロッパでは今、近代以降、欧米が牽引してきた資本主義（財産獲得のため無制限の自由競争を正義とする考え）によるグローバリズムの方向性を改めようという意識が市民レベルで強まっています。なぜなら、このグローバリズムは植民地時代にはその牙を後進国に向けていきました。現代は世界中の富を食い潰し、その牙がいまや自分達に襲いかかって来たからです。結果、富の格差と民主主義の危機が欧米諸国の深刻な社会問題となって顕在化してきたのです。

しかし、彼等がこれを正すには少なくとも近代国民国家誕生以前まで帰らなければなりません。しかし、そこまで帰っても排他的宗教統治の時代しかない。そこで次に帰るべきところとなると、宗教によって統一された時代以前にまで帰らなければならない。そうすると、それ以前にそれぞれの民族が独自に有していた信仰や、それら信仰の中にある民族の理想といったものに考えが及ぶようになる。例えばラスコーの壁画の中にそのような根源的価値観を見出すことができるのではないかと考える。

昨年はポーランド、その前はドイツ、その前はギリシャで武道講習会を開催してきましたが、

それぞれが民族の神話や信仰の世界に立ち帰って、自分達は何のためにこの社会を築き上げてきたのかを熱心に探ろうとしているのです。

ところが残念なことに、キリスト教以前の価値観に帰ろうとしても遺跡は残っていますが、祭りや信仰が残っていないのです。ラスコーの壁画を見ても、考古学的な分析は出来ませんが、精神的な意味合いについては全く分からない。ドイツでもポーランドでも、民族神話の中に巨木を神と仰いできた伝承が残されていますが、どのような価値観の下に、どのような生活を営み、どのような社会規範が存在していたのが全く分からない。ギリシャ神話は世界中に知られていますが、アテネのオリンポス神殿に行ってみても、そこには魂に息吹を注ぐような生きた精神の継承はありません。それは、ヨーロッパの遺跡が霊不在の単なる廃墟として残っているだけで、日本のように祭りが継続され、生きた信仰が脈々と伝えられていないからです。しかし、彼等は、民族独自の信仰が自分達の真の価値観を探す大きな手立てになると考えているのです。

明治神宮至誠館に、武道と神道の勉強をする為にきていたポーランド人留学生がこんな話をしています。「ポーランド国旗は日の丸と同様、赤と白の二色だが、赤と白が上下に分かれています。ポーランドは国が大変な状況になると国民の意見が纏まらず、過去に二度も国を失った。今もポーランドという国はあるが、金融危機で大変な状況にあり、またバラバラになって国が無くなってしまっているのではないかと心配だ。それに対して日本の国旗は、同じ二色でも真ん中にお日様があり、国旗に国の中心がきちんと描かれている。危機的状況になると、この中心に団結しているっそう強くなる」と。彼は古事記を少し勉強していましたから、天地が初めて開けた時、はじめに天の中心である天之御中主神が生まれ、次に高御産巢日神と神産巢日神が生まれて産霊（むすひ）の活動、つまり霊を産む活動が始まったという日本の神話を認識していたのでしよう。

古事記が伝える天地の始まりは、天之御中主神を中心として、神産巢日神（中心にエネルギーを集め充足させる活動）と高御産巢日神（中心からエネルギーを放出する活動）の産霊（ムスヒ）の活動により万物の生成が始まる。あえて科学の言葉を使用すれば、あらゆるエネルギーを引き寄せるブラックホールのような中心が生まれ、その中心が高密度に極まって爆発的にエネルギーを放出してビックバンが起こり、そこから惑星群が発生して宇宙が出来上がってきたことを伝えているのだとおもいます。しかし、科学は、これを単に物質的現象としてしか説明できませんが、日本神話では、物的創造は常に霊的活動によって引き起こされるととらえるのです。だから、産霊（ムスヒ）という言葉をつかいます。さらに、天之御中主神の産霊の活動によって太陽が生まれると、今度は太陽を中心とした産霊の活動によって地球が生まれる。そして地球が生まれると、地球の産霊の活動によって地球上のあらゆる物が生まれてくる。この活動は今現在連綿として継続している。このような宇宙全体の統一した自然活動の中で、日本の国は、天照大御神の霊を受け継がれる天皇陛下を中心として発展してきたわけです。

我々にもそれぞれに先祖がいますが、それぞれ「原点・もともと」を質していくと必ず同じ原点に帰る。最後には、天之御中主神に帰るというのが日本人の発想です。フランス人も「原点」を辿っていくと、多分我々と同じところに辿り着くはずです。フランス人だけでなく、全ての人が「原点」で必ず繋がっているのです。それが日本の「家」の発想で、村も家、国も家、世界も家という共和共栄の思想につながります。また、宇宙の創造と活動を産霊の活動ととらえることで、我々一人ひとりが、全体として統一した活動をなし、自然全体の発展に寄与しているという人間の生存理由（レーゾン・デートル）が明らかになります。

私は東北出身ですが、やはり田舎では氏神様や鎮守様が部落の真ん中にあり、それを中心として一つの共同体を形成し皆が生活を営んでいる。ですから日本人の感覚からいうと、皆が共同で暮らし、皆で共に発展していくことはきわめて自然な考え方です。それに対して、例えばイギリスでは、サッチャー首相が「社会というものは実存しない。あるのは個人だけだ」と言い切ったように、個人が経済活動で裕福になれば国家も裕福になるといった市場主義の立場をとってきました。しかし、個人が裕福になっても社会は全く裕福にならなかった。貧富の差が広がっただけで国家として何も利益はないどころか、国家の主権までが一部の富める者に乗っ取られようとしています。これは、自由主義の勝利者が民主主義を駆逐することを意味します。

そこでキヤメロン氏が「社会というものは必要だ」と主張して首相になりました。ところがイギリスでは、今まで「社会なんか実存しない」と教育してきましたから、「社会とは何だ。社会活動とはどうすればいいのだ」といった基礎的な知識と経験が不足しているのです。

人間は個人で存在するという発想の自由競争主義社会では、「万人の万人に対する戦争」といった過度の競争を防止するために社会契約が必要になってくる。社会契約は民主主義法治国家の基盤ですが、この考えの大前提として、自己の生命、自由、財産は侵されざる権利だという思想がありますから、この権利の行使は民主主義に優先されることになる。それが市場の理論です。それは、我々が考える道徳的な考え方ではありませんから、結果として今のような貧富の差が極端なまでに隔絶する状況になるのです。

このように、市場原理社会は全くの人工的不自然なる思想が造りだした世界ですから、いつか何処かで必ず無理が来ます。仮にヨーロッパの経済危機が解消されたようにみえても、おそらく次から次へと問題が起こってくるでしょう。人類が総出で頑張ってみても宇宙全体の自然の原理と違っていれば、途中で必ず挫折せざるを得ない。宇宙全体どころか地球の摂理に適わないルールを強要する生き物が地球上に存在することは難しいのです。

それに対して日本人は、宇宙全体が統一された産霊の力により繋がっていると神話の中で語り伝えていきますから、社会は当たり前前に実存するし、そもそも、人間個人が完全孤立して生きていけないという状態は実存しないし、何にも頼らずに生きていけるといふ傲慢なる感覚を持ち合わせていないのです。

そうした日本人の考え方は欧米の人々に極めて重要な示唆を与えるものですが、彼等には容易にこれを受け入れられる感性がありません。何百年も違う感性で神と人との関係を捉えてきたわけですから、簡単には受容できないのです。ただ、ヨーロッパの思慮深い人達は、そうした価値に気付き始めています。東日本大震災という危機的な状況の中で自分を犠牲にしても周りの人を助けようとする日本人の社会は、彼らにとつて素晴らしい社会であり、理想的な社会なのです。実は、そうした考えを極限まで主体的に高めていく、つまり自分は社会のために存在し自分を犠牲にするのは当たり前、世のため人のために戦争であろうが屈せずに行動する、そうした状態にまで鍛錬しようとするのが日本武道の精神です。人間も万物と同じように天之御中主神の産霊の霊(ひ)の活動から生まれてきている以上、この霊を受け継いでいます。これを直霊(なおひ)と言いますが、この直霊という精神の中心と臍の下にある臍下丹田という物質的な力の中心となるところを一緒に鍛錬していく。鍛錬して鍛錬して、その力を活用するように心掛ける。これが武道の鍛錬で、鍛錬の仕方も結局は神話と基本的には同じなのです。自分の心身の中心(天之御中主神)を意識する、自覚するということから始まり、その中心を強くしていく(神産巢日神)。そうすると、自ずとその力は外に出ていく(高御産巢日神)。それが武術として力が現れる段階なのです。

日本武道では、よく「力むな」ということが言われますが、「力む」ということは、中心の他に力点を作るということです。足首、膝、手首、肘、肩、首といった関節が力み易いのですが、体の構造上、力むと中心の力がその先に行き渡り難くなるということです。欧米人は発想が異なり、体のパーツを鍛え上げていく発想です。人間の総合力や精神力とは一切関係のない機械的発想です。武道とはそうではなくて臍下丹田の力、中心の力の活用を工夫するものなのです。日本人は何事においても中心を意識しますが、これこそが日本人の強さの根源なのです。

今の日本には、やたらと中心が多すぎて国民の意見がまとまらず国家としての力が出ない。これは武道的に言えば、あちこちに力みがある悪しき状態です。それによって、本当の中心である天皇陛下の御稜威が阻害されています。そして、現在の日本人に最も欠落している徳、それは「武徳」です。

武道というと、江戸時代以降、徳川幕府の権威権力保全のため、全ての武士に「忠義」を強要したこともあり、専ら臣下が武家の主に服従する精神規範として扱われましたが、これは、日本本来の武道とは異なるものです。

本来の日本の武徳は、天津日嗣であられる天皇陛下御自らが継承されている御聖徳を元としています。神話では伊邪那岐命と伊邪那美命が修理固成の神勅を戴いた時に天沼矛を授かりますが、矛という武器を授かり天神の御心を承ったことで神徳と武徳が合一したのです。

例えば、伊邪那岐命から怒られた須佐之男神が、姉君である天照大御神にお暇乞いをするため

に高天原に行こうとした時、余りにも凄まじい様態であるのに対して、天照大御神は男装し戦構えをして「伊都之男建（いつのおたけび）踏み建びて」地面の土が雪粉になるくらい踏みしめて待ち構えます。これにはさすがの須佐之男神も畏まるわけですが、ここに天照大御神の荒魂が現われます。これが武徳です。専ら和魂、和する魂の象徴である天照大御神でさえ、いざという時（和を乱すものに対して）は武徳を現す。ここが大事なところで、伊勢の神宮に行っても荒祭宮があるように天照大御神はただ優しい神ではないのです。

武の神様といえば鹿島神宮の御祭神である建御雷之神ですが、この建御雷之神は国譲りの時に使者として大国主神に交渉に行った神です。実はその前に二度、使者が送られましたが、いずれも失敗に終わりました。一回目は天菩比神（あめのほひのかみ）で、この神は大国主神に媚びて交渉にならず帰っても来ない。二回目は天若日子（あめのわかひこ）で、この神には弓矢を渡して交渉に行かせたものの大国主神の娘と結婚して自分が跡継ぎになろうといった下心を抱き、終にはその弓矢に当たって死んでしまいます。そして三回目によく交渉が成立する。建御雷之神は戦争覚悟で交渉に行き、まずは剣を刺してその前に座り、武力に訴えず話し合いで解決しようとする。相手方の要望を聞きます。すると大国主神は、それなら国譲りをしてもいいが、息子がいるので確認して欲しいという。その息子の一人が建御名方神で、こちらは会うなり戦になります。ところが建御雷之神が葦の藁のように掴んで放り投げたものですから、建御名方神は諏訪のほとりまで逃げて降参する。すると建御雷之神は戦を止めて一社を建て建御名方神をお祭りします。これが諏訪大社です。そして大国主神を出雲にお祭りする。これが日本の武の徳を象徴する逸話です。

ですから日本の武道は、寸で止めて降参の意志を確認します。私は、自衛隊で特殊部隊を作った経歴上、様々な国の格闘術を学びましたが、どの国の格闘術も目的は人を殺すことです。寸で止めるなどという発想はありません。

ところが日本の武道は殺傷を目的とするのではなく、相手の心の正常化を促す威力なのです。これは禊祓と一緒だと思います。何故そのような発想に立つかという点、もともと敵対する相手も直霊を持っており、その直霊に気付かせることが武の役割だからです。荒振る魂を静めて直霊の心を自覚させ、自覚したと見たらそこで戦を止めて包容同化し、和してともに未来を築こうという考え方です。日本の武道がスポーツ化して寸止めになったのではなく、もともと寸で止めて相手の意思を確認する。それでもまつろわなければ、成敗するしかない。あまりにも身が穢れてしまえば、身を削いで直霊を救済する必要があるということなのです。

武道の「武」の話は神話にも出てきますが、何よりも初代の神武天皇、神倭伊波禮毘古命（かむやまといわれひこのみこと）は東征の時は凄まじいばかりの荒振る精神を発揚しました。那賀須泥毘古（ながすねびこ）という強敵と猛々しく戦います。そして最後に橿原で建国の詔を發します。橿原建都の詔には、「夫れ大人の制を立つ、義必ず時に随ふ。いやしくも民に利有らば、

何ぞ聖造に妨はむ」と記してあります。日本の民、国民が幸せになることであれば、神勅で命ぜられた天皇の使命に違ふことはない。時の制度などというものは、それに応じて変えればよい。要は「国民が幸せになるかどうかが常に最優先で、制度が先にあるなどということはない」と仰っているのです。今の憲法下の法体系は、まったく逆で制度によって国民が苦しめられています。そして「恭みて宝位に臨み、以って元元を鎮むべし」、「上は即ち乾霊の國を授けたまう徳に答へ」と続きますが、上というのは御自身のこと、神勅を受けて乾霊（あまつかみ）の期待に相應るといふ御自身の役割、使命を自らに課しています。その上で「下は即ち皇孫の正を養ひたまえ心を弘めむ」と、自分がまず模範を示すから国民はその聖徳を広めなさいと仰っている。さらには「八紘を掩ひて宇と為むこと、亦よからずや」と、国民が一つの家族のように屋根の下で暮らせる社会を作っていこうという我が国の建国の理念を示されています。そして歴代の天皇はこれを継承されていらっしやる。この優しい和魂と、これを乱す者に対しては荒魂が現れて正していく。ひとつの所から荒魂と和魂が状況に応じて現れるから神武なのです。

武徳の国家的発揚として、亀山上皇が元寇の時に我が身を犠牲にしても国を守り給えと「敵国降伏」の祈願をされました。それに応えて時の執権北条時宗は、圧倒的軍勢の敵に対して、大義はこちらにあると断固戦い、二度の侵攻を撥ね返しました。神風はあつたかもしれませんが、それだけで勝てるはずはない。極めて質の高い、極めて多くの人間がこの国の大義を守るために参集して戦ったのです。当時、世界無敵だった強国の攻撃を二度に亘って退けたのです。

それから孝明天皇の詔も同様です。江戸末期、我が国に危機的な事態が起こり、「幕府だけで勝手に国の大事を決めるな。国中の有能な人達を集めてまず話し合いをせよ」という孝明天皇の御意志を無視して、井伊大老は勅許を得ずに条約を締結してしまいます。和宮様を降嫁させても何らの措置もしない。孝明天皇はこの時、「天下心を合わせ力を一にして、十年内を限り、武備充實せしめ、断然として夷虜に論ずる利害を以てし、一切に之を謝絶し、若し聴かざれば、速やかに膺懲の師を擧げて、海内の全力を以て、入りては守り、出ては制せば、豈に神州の元気を恢復せんに難きこと有らんや」と仰っています。武力を持って意を強要するような卑劣な国家にたいし、堂々と相互の利害を調整し、相手が全くこれを拒絶するようであれば、我が国全力を挙げて断固戦うべし。戦力が足りないというのなら、十年の猶予を与える。この間に武備を備えよ。そうすれば日本の元氣（元々の正氣）が回復すると仰ったのです。

「若し然らずして、惟に因循姑息、舊套に従つて改めざれば、海内疲弊の極、卒には戎虜の術中に陥り、坐しながら膝を犬羊に屈し、殷鑑遠からず、印度の覆轍を踏めば、朕、實に何を以てか、先皇在天の神靈に謝せんや」とは、天津日嗣の天皇陛下が断固神勅を貫こうとするものの、幕府が姑息な外交を繰り返して、ついには相手の術中に落ちていく有様を眼にしての悲痛のお叫びです。

そして「若し幕府、十年内を限りて、朕が命に従ひ、膺懲の師を作さずんば、朕、實に断然として、神武天皇・神功皇后の遺蹤に則とり、公卿百官と、天下の牧伯を帥いて、親征せんとす。卿等、其斯意を體して、以て朕に報ぜんことを計れ」とは、幕府がやらないのならば、神武東征や神功皇后にならって御自ら指揮をとり戦うという御意志を示されたものです。素晴らしい武徳の発揚ですが、幕府はこれに応えず、期待した水戸藩主、薩摩藩主も孝明天皇御存命の間はこれに応えることなく『澄まし得ぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ國民』という御製を残して崩御なされます。しかし、幸いなことに下々の武士がこれに応えます。孝明天皇を中心に下々の武士の心が集まり幕末く明治維新となったのです。

では何故、下々の武士が立ち上がったのか。それは楠木正成、菊池武時が存在したからです。武徳とは、天津日嗣の天皇陛下が発するものですが、この御聖徳を身にたいして実行し広める役割を担っているつわものが「もののふ」で、神武東征く建国以来、神武天皇にずっと従ってきた大伴、物部、佐伯氏などがそれにあたります。大化の改新以降、荘園制度が出来上がると荘園と団化して実力を蓄え平将門や藤原純友などが反乱を起こすと、平家、源氏といった武家武門の棟梁が自ら進んで天皇陛下の詔勅を受けて乱を平定するようになります。ここにおいて武家武道とこのような新たな武の形態が生まれます。これは、武家の棟梁が唯一、直接的に天皇陛下に忠を示し、下々の武士はもっぱら棟梁に対する忠を示せばよいとなります。また、それは、家の発展と恩賞を背景に契約的に発展します。結局、源氏や北条氏の前半までは、武家の棟梁が天皇に忠を示していましたが、武家の棟梁が天皇に対する忠を失い、それは結局下々の武士に波及し下克上が常態化して社会秩序は崩壊しました。戦国乱世と呼ばれる日本歴史上の自由競争の時代です。このように武士の忠が、家別に矮小化され、恩賞目当ての契約的性格が常態化されてきた中で、後醍醐天皇の世を正す呼びかけに、下々の兵である楠木正成、菊池武時等が、武家の棟梁に反旗を翻し、直接天皇への忠を掲げて兵を挙げます。これは、たとえ身分が低かろうが、天皇陛下に対する忠心を実行するに聊かの緩みがないという行動であって、それまでの武士社会の秩序をひっくり返す画期的な実例であります。このことがあったからこそ、徳川幕政の極めて強力な統制下でも、下々の武士が大楠公の精神に倣って立ち上がり、明治維新へと繋がっていったのです。

明治の御代、五箇条の御誓文と同日に天皇陛下は国民に宸翰を発して直接語りかけます。「今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其所を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事朕自身骨を勞し心志を苦しめ、艱難の先に立ち、古列祖の尽させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ、始めて天職を奉して、億兆の君たる所に背かざるべし」という御覚悟です。

足利・徳川時代と、天皇陛下が直接政治に口をはさむ、あるいは直接親政をするということも幕府が禁止してきたことを覆され、「朕徒らに九重中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を

忘るる時は、遂に各国の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめんことを恐る」と仰り、「故に朕ここに百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を継述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を経営し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す」と断固、我が国の大義を世界中に知らしめるために自らその先頭に立つとの御意志を示されます。この試みがあつたからこそ明治維新は成功し、日清・日露の戦争にも勝利して瞬く間に日本は世界の一流国になるのです。

因みに日本は大国かといった話がありますが、大国とは少なくとも独自の価値観に基づく世界観、このような世界を作りたいという明確な意志がないといけません。「他の大国がこう言っているから、それに従う」といった大国などあるわけはありません。そして主体的な自国の政略を計画し実行し得る実力があるのが大国です。日本は今、軍事力も経済力も相当な力を有していますが、自らの世界観も政略もありませんから大国とは呼べないのです。その意味で明治時代は、全く実力が伴っていない状態の中で俄然日本の大義を打ち立てたところに大国としての起源があるのです。今の日本に決定的に欠落しているのが、天皇陛下を中心として「家族のような社会を築く」としてきた日本民族の大義を堂々と打ち出す知恵と勇気即ち「武徳」です。これがなくては国家の戦略など立てようがありません。

そうした中で今上陛下は先般、被災地に赴かれて鎮魂されましたが、これは神武天皇以来の天津日嗣の力を国民の目に分かるような形でお示しになられたということです。御体調が良いはずもありませんし、御無理をなさつてのことだと思えますが、聖上は神武建国以来、全く変わらず神武の御聖徳を継承され実行なさつておられるのです。

それに対して問題なのは国民の方です。少なくとも我々の先祖は御聖徳を広める努力を積み重ねてきました。その結果として今、これほどの国家として存在しているわけですが、国民の武徳は靖國神社の英霊の武徳を最後に途絶えてしまっています。この状況を変えない限り、孝明天皇と同様に天皇陛下お一人に孤軍奮闘を強いることになってしまいます。国民としては大変申し訳のないことです。

ところで日本の伝統とは一体何なのか。それは一言で言えば、神武天皇の建国の御意志であり、その御意志のもととなるのが神勅であつて、神話の中に語り伝えられている宇宙観、世界観、人間観、民と人との関わりに尽きるのだと思います。建国の大理想があり、その大理想と現状を見比べた中で何処をどう直すかが具体的になって始めて国が立ち直るのです。しかし今の日本は、国政を正すといいながら、政党はどこ首相を誰にするとか、あれもこれも反対と文句を言う次元で終始しています。政権が変わつて二年が経ちましたが何も状況が変わらないのですから、根本の仕組みが間違っているとしか言いようがないのです。

今の日本は二重構造になつていて、東日本大震災で分かつたように、伝統精神をきちんと継承

している国民と伝統的社會規範は存在しているのです。そしてその道徳的崇高さは、世界に高く評価されている。サッチャーは社會が実存しないと云いましたが、日本の場合は厳然と道徳的社會が実存している。それを我々は表舞台に出していかなければいけない。今表に出ているのは、戦後体制とよばれるもので、この仕組みは伝統的精神を否定する仕組みですから、その仕組みの中で、一番悪いものと二番目に悪いものを選択していてもどうしようもないのです。社會の表裏を逆転するためには武徳が必要です。戦う気合いが出てこない駄目なのです。

戦とは、要するに意思の戦いです。戦争もそうです。国と国の意思の対立が起こり、その対立する片方の意思を挫くための手段として戦争が行われますが、あくまでこれは意思の戦いです。物理的な問題ではないのです。物理的な力を比較して「これでは適わない」という問題ではない。本心に戦おうと思つて必勝を期すならば、まず意思が屈しないことです。意思が屈しないためには、目的意識が強烈に出なくては行けない。すぐ諦めるような目標や目的であれば戦いは出来ません。そしてその目的意識が強力になるということは、突き詰めていうと自分の人生観、あるいは国の天命、天与、方向性、実際に自分達は将来どういう国を造りたいと願つてきたかに強く思いを馳せて、それに向けて活動を起こしていくことです。

武術では、お互いが剣を交えることを「切りむすぶ」と言います。これは、産霊（ムスヒ）と同じで、敵と太刀を合わせた時に、何かが生まれるのです。戦いの背景にある相手の思いが、その一撃から感じられるのです。邪悪な思いなのか、清純な思いなのかが一太刀に現れます。神道でいう明浄正直の精神で戦つた時には仮に相手に切られたとしても、その精神は伝わると思いますが。そうした戦をすればいいのです。

私はイラクに自分の部隊が行つた時、隊員には「イラクの土地にはイラクの産土神がいる。仮にその産土神の怒りがイラクの人々を通じて現れているのだとすれば、それは大変申し訳ないことだ。法律上の制約はあるが、仮に自衛隊の車が攻撃されて自衛官が死んでも、そこに車を停めて、まず周りのイラク人に『皆さんは大丈夫でしたか、お怪我はありませんか』と尋ねなさい。そして怪我人がいたら、その人達をまず介助しなさいと。その次に自分等の仲間の処理をしなさい。肉片になつて吹つ飛んだ友が居たならば、その肉片をきれいに集めて、あとで鎮魂するためにちゃんと清掃してきなさい。その上でイラク人に『済みません、ちよつと汚してしまいました』と一言かけて帰つて来なさい。そうしたら二度と攻撃はされないはずだ』と話しました。

戦いとは、ただ攻撃すればいいというものではない。相手の戦意をどう静め、「直霊」を自覚させるかなのです。そういう力を日本人は持つていると思つています。日本人がその価値を取り戻して、靖國神社の英霊が残つていつたこの精神を今の世にもう一度恢復させる。まさに日本の復興はそこから始まるのだと思つています。

(了)

たくさん質問を戴きましたが、「日本人の正しい価値観に戻るにはどうすればいいか」、「随分と酷い教育をどう是正したらいいか」という質問がありましたので、まず教育に関してお答えします。

日本の三大改革は明治維新、建武の中興、大化の改新と言われていますが、特に明治維新は現在と照らし合わせて深く研究すべき出来事だと思います。当時は今よりも雁字搦めの状況にあり、しかも武力政権でしたから、統治機構に合わない人間を武力で排除するという仕組みがありました。今でもそういう仕組みはありますが、今以上に厳しい状況にあったと思います。

そうした中で明治維新が成立しますが、それは下々の間に一つの教育的素材があったからで、水戸義公が編纂した『大日本史』が非常に重要な役割を果たしました。それによって吉田松陰など様々な人々が行動を起こし、その最初の実力行使となったが桜田門外の変でした。水戸学、国学の教育を受けた十八人の人たちが止むに止まれぬ思いから井伊大老を殺害し、大きく歴史を変えていきます。つまり、その十八名が学んだ教育が、最初の少数精鋭たるべき人間を育てたのです。安倍政権下で少しばかり教育基本法が改正されたのは結構なことですが、重要なのは武徳のある人間が現れてリーダーとなり得る人材を一生懸命教育することです。

日本の教育は江戸時代まで、一般庶民の教育に関してはヨーロッパなどと比べても相当に進んでいました。ただ、明治時代になって武家が解体され、国の中心を担う人材を教育する仕組みがなかった。東大の前身たる開成学校などが作られましたが、これは語学や文芸教育に力が注がれるいわゆる専門学校で徳操教育は殆どされませんでした。貴族と軍人にたいする徳操教育には早くから力が注がれましたが、一般国民の道德観は、文明開化の下に荒廃します。

そこで元田永孚が大変苦勞して、明治天皇が懸念された教育について策を練り、出来上がったのが教育勅語です。ここから日本の国民徳操教育が始まります。以降、日本は日清・日露という対外戦争に勝利する。世界の国々から鼻にもかけられていなかった小国が大国に勝ったことで、各国は何がこの国にこれほどの力を出させたのかを研究し始める。そして国際社会は教育の中枢である教育勅語によって国民教育、国民の道德教育が徹底されていることを知り、日本の教育の素晴らしさを絶賛します。

このように何をするにつけても教育は重要です。明治維新は、松下村塾の吉田松陰や弘道館の藤田東湖のような日本精神を教育する熱心な教育機関と指導者によってその礎が築かれたのです。

特に、新しいことをやろうとすれば、常に反対があるわけで、そうした反対を打破する猛々しさの教育が重要です。例えば廃藩置県をする際、沢山の反対派が存在しました。当時の各藩は軍事力も経済力も持った独立国のような存在でしたから、中央政府がこれを没収するとなればたまったものでない。そこで西郷隆盛は各藩代表を集めて会議をする際に、「これに反対したら生きては帰れない」と恫喝して合意を取り付けます。乱暴な話ですが、国民の正統な価値観とそれに

基づく社会の大改革を図る時にはそれも必要なことでしよう。

それから教育に関してはフランスもドイツもそうですが、リーダーを育てる教育と一般国民の教育が別にされているということです。フランスでは政治を担おうという人間は、そのための専門学校に行かなければなりません。ここでは技術を教えるのではなく、フランス人としての徳操を教えます。国を論じたり政治を実行する人間には、立派なフランス人となるべき教育を施さなければいけないと考えるからです。

ドイツの場合は十歳で自分自身の進路を決めますが、技術職に就くか、政治職に就いて社会の役割を果たすのか、あるいは学術的な方向に進むのかといった選択を迫られて、種類の異なる学校に進むこととなります。ですからドイツでは、大学まで学校は無償で授業料はいりません。それは自由勝手に勉強させるということではなく、社会でこういう役割を果たすという意志が確立した人材を、国の費用で育成するという考え方です。それに比べて日本の高校無償化は、国民として有為の人材を育てる具体的方向性もなく税金をつぎ込むだけですから国策としては全く無意味です。

憲法に関する質問も在りました。憲法が最高の法規範で世の中にこれ以上のものは存在しないといった言い方がされますが、ヨーロッパで生まれた憲法の内容は、基本的には政体を規定するものです。歴史の浅いアメリカは現憲法下の政体しかありませんから、政体を変えたとき国が存続するかどうかは分かりませんが、日本の政体は、古代から何度も変わっています。慣習法の時代もあれば律令体制の時期もある。つまり、世の中や世界が変わるのですから、政治の体制も変わるべきだし変わらざるを得ない。それでも、日本には変わらない国体があるから国家は存続できるのです。今の憲法で規定する政治体制をこれ以上続けても何も改善されることがなかったので、すから、国体に立ち返り憲法を変え、政体を変えるべきです。戦後政体は、我が国の国体とは相性が悪い。国体を元にして、政体を最もいい形に変えればいいのです。

因みに教育については、大日本帝国憲法にも規定はありませんでしたし現行憲法にもありません。ただ、現在の教育基本法は憲法の理念に基づいて制定され、憲法の理念を普及することを教育の目的としています。つまり、憲法前文に書かれた英米の思想が戦後教育の柱になっているわけです。憲法前文に書かれている人間観、国家観はイギリスの権利の章典やアメリカの独立宣言と同じ内容で、日本の伝統文化とは相反するものですから、憲法問題の本質は、憲法の何条を変えらなければならないのではなく、前文に記述されている根本的社会観と価値基準を変えなければ基本的に何も変わらないということです。

我が国は神武天皇が大理想を掲げて建国しましたが、それは何も日本に限ったことではありません。天之御中主神の精神を継承して天理にかなった社会を広げていくことが日本の使命である

ように、他の国々もそれぞれの価値観のもとに建国し、その価値観を世界に広めようとしているわけです。米国が主導する自由競争の勝者が支配する世界を正しいとする価値観と、日本民族が伝統的に培ってきた人々が互いに家族のように助け合い慈しみ合う社会が良いとする価値観のどちらを広めるべきかという話です。私は間違いなく後者だと思いますし、そのためには日本の和魂、和する心を広めるためにも荒魂が必要だということです。孝明天皇の詔勅にも相手に対して和を提唱し、それが受け容れられないのならば攻めるとあります。植民地化・現在で言えば富めるものの世界支配を利益対抗的に戦うのではなく、植民地化しあるいはマネーの力で世界を支配し、善良な人々の文化伝統さらには生命財産までも破壊略奪しという邪心を正すために戦うということです。

このことに関連して北朝鮮や中国の現状に関する質問がありました。北朝鮮も中国も基本的には日本以上に纏まりを欠いていて、それを何とか統治しているといった状態にあります。日本に対して攻撃的な発言をする人がいたとしても、一方では日本と手を結んで何かをしたいと思っている人もいます。ですから日本人的な発想で、直霊（なおひ）の心を正しい方向に向かわせるよう努力する。すでに正しい心を発揚している人と仲良くして、その人達はその国で力を広げられるように支援するという方法がいいのではないかと思います。

拉致問題に関して言えば、これは北朝鮮の問題というより日本政府の問題です。拉致に気付いても、知らぬ振りをしてきたのは我が国の政府です。北朝鮮側が「帰す」と言っても「無理に帰さなくてもいい」というような外務省に任せている政府が問題なのです。これは拉致問題に限らず、戦後の日本全体が抱えている様々な問題にも共通することで、武徳の欠如を原因としております。リスクを冒してでも国民を必ず取り返すという決断ができない戦後体制の問題です。防衛庁長官を経験された人物に「自衛隊の活動範囲を中国の方に少し広げましょう」といった話をしたら、「そんなこととして中国が怒ったらどうするんだ」と怒っていました。領土問題にしてもそうですが、強そうな相手には弱く、弱そうな相手には強く出る。昨今は、犯罪者は自分より弱い者を見付けて惨たらしい犯罪を繰り返します。自分より強い者に対する犯罪は殆どなくなり、弱い者に対して犯罪が行われている。これは国の政治姿勢が個人にまで反映した結果です。それが拉致問題未解決の理由だと思います。

それから大東亜戦争についても質問がありました。大東亜戦争は極めて無謀で馬鹿げた戦争だったといった教えられ方がされていますが、当時の欧米諸国による植民地主義に対し、日本は民族協和の世界を打ち立てる大思想を打ち出し、その結果として戦争をせざるを得なくなりました。当然予想されたことであったのだが、対米決戦に向けた決意と諸準備が、国家中枢において不十分であった点は大いに反省するべきでしょう。

大東亜戦争以降、アメリカはやがてベトナム戦争でベトナムのゲリラ戦に屈しますが、それは

数名の日本人が指導した中野学校のゲリラ戦法でした。そのゲリラ戦指導者と同じレベルの中野戦士が二百六十数名、本土決戦ではゲリラ戦をやるうと満を持して待機していました。国民全員が一億玉砕を覚悟して準備もしていた。硫黄島の戦いで日本軍は、弾も食物もない熱地獄の中で、雨霰のような空襲を受けながらも果敢に戦い、損害は日本軍よりアメリカ軍の方が大きかった。本土全体を使ってゲリラ戦を戦ったら絶対に負けるはずがない。ですから私は勝てない戦争だったとは思っていません。明治天皇と明治の元勳・軍人なら確実に勝てたでしょう。残念ながら、大東亜戦争は作戦が進むにつれ、天皇陛下、軍部、政府、国民の心はばらばらになっていった。ついに、昭和天皇が戦争を止める決定を下した。全うな軍人と国民は最後まで戦う意志があつたと思いますが、大理想を掲げた戦争を天皇陛下自ら終戦にしたのです。

日本は元寇以来、近代戦においては不敗です。天皇陛下が止めろと言わない限り軍は戦を止めることはない。大東亜戦争も、正しい大義の下で戦い抜けば勝てる戦いだつた。しかし、日本の中の卑怯な裏切り者が、アメリカ軍の指示をうけて「愚かな日本人が犯した愚かな戦争」というイメージに大東亜戦史を全て書き換えた。このように戦後、アメリカに屈した寝返り軍人は結構いました。海上自衛隊を作った野村吉三郎も、陸上自衛隊を作った辰巳栄一もアメリカの指示通りに行動しました。野村吉三郎は、ハルノート作成時から米側と共謀し日本の宣戦布告を故意に米側に伝えなかつた疑いがある、あの駐米大使です。マッカーサーの占領土地を歓喜して迎えた卑劣な日本人が戦後日本を作った。大東亜戦争が正しく伝わらなかつた原因は、こうした人達が戦後の体制の中で、歴史を改ざんし日本の大義を地に貶めたことに原因があります。

フランスで何故、武道が盛んなのかという質問がありました。フランスは世界に先駆けて近代思想を作った国で、軍事でもナポレオンが現れて近代戦争の新たな仕組みを作りました。それまで戦争はプロの軍人だけが参加する国家事業でした。ですからプロイセンのクラウゼビッツがナポレオンの戦争を見て驚愕するわけです。それまではプロの軍人の政治的な活動として戦争が始まり、宣戦布告すると戦争態勢をとります。そしてその態勢を見て勝負ありと思えば、すぐ講和をして実際には余り戦争をしていない。ですから戦争というのは一般国民が知らないうちに始まり、知らないうちに終わっているというのがナポレオン以前の戦争です。ところがナポレオンは平民をも投入して、国力の全てを戦争に投入するという方法で他国を圧倒しました。これは画期的な思想の転換です。

さらにフランス革命を起こして王制を廃し、共和制を作った。このことが何故正当なのかという理論を作ったのもフランスです。ルソーの社会契約論等によって、総ての殺戮や破壊も含めて国民国家は正当なのだという理論付けをした。ですから彼等は、逆にそれが絶対価値ではないということを知っているのです。そういうこともあって、彼等は他の民族から学ぶということに関しては非常に積極的なのです。

その一方で、本当に日本の神道的精神を理解出来るのかというと、これはなかなか難しい。武道をしても、理論的に考えて理解しようとはしますが、日本人のような感性での修得はなかなか出来ません。例えばフェンシングでは、自分の体を出るだけ相手の遠く安全なところに置いて攻撃するという発想です。これに対して日本では、己の体を餌にして相手の刀の真下に入れて技を出す。技術の未熟な人は切られて結構、ただし死ぬ前に一太刀浴びせるというだけのこと、という発想です。この発想の違いはやはり民族信仰、民族神話の違いに繋がっていく。

私はギリシャ神話についてギリシャ人と話をすることもあるのですが、特徴的なのは、ギリシヤ神話では、最高神はゼウスですが、それはゼウスが一番強い神で、日本の神話でいうと須佐之男神か建御雷之神になります。これに対して、日本の場合は須佐之男神が最高神ではなく、天照大御神という清い神、慈愛に満ちた神が最高神です。

ここに民族の発想の違いがあります。ですから根本的に理解するにはまだまだ時間がかかると思います。でも彼等が理解し易い武道等日本精神の形から入ると、徐々に分かってくるのだと思います。特に東日本大震災以降、そうした日本の発想が、世界的に受け容れられるような状況にもあります。戦前は、アメリカのプロパガンダもあり、欧米では日本人はとんでもない民族だというのが通説でした。このような民族は教育し直さなければいけないというアメリカの考えは、GHQが日本の歴史を否定し日本語までも止めさせようとした事実にも明らかです。今回の大震災では、米国の占領政策によって根絶やしにされたと考えられていた日本の伝統精神が、このような美しく強い形で今なお継承されているという事実に驚きを示した報道や論文が欧米で数多く紹介されました。

善し悪しは別にして、グローバル化が進んだことで日本人の本質がかなり正しく、世界中の人々に伝わるようになってきています。日本人は、理論で人を口説くのではなく、実行して見せて「どうですか」といった方法で人々を感化共鳴させる手法をとりますから時間がかかるのですが、これは神武天皇がみことのでそう仰たように、物事の善し悪しは実践を通じて示すしかない。地道ですが、虚構の理論社会より実践で築き上げた社会の方が正しく健全です。

海外青年協力隊など日本人が海外に出て行って活動してくると、日本人に直接会った人達は「日本人は本当に素晴らしい」と評価してくれます。自衛隊の国際活動でも、東ティモールでは大統領がわざわざ日本にお礼に来て、「私はこのような軍隊が世界にあるとは思わなかった。我々と一緒に涙して汗を流して、我々のことを本当に思っ活動してくれる。そんな軍隊が世界中にあったとは信じ難い」と言っ帰って行かれました。皆さんは、世界中のPKOや国連活動を、無条件で善良なる行為と思っっているかも知れませんが、現地に行って見てみると意外に酷いものです。例えば、国連本部の職員は汚くて危険な所には行かない。現地の有力者に金を渡して体裁を繕うということもあります。ひどいNGO等は、自分で地雷を埋設して仕事を作っっている。日

本人のように、本当に現地の人のために身骨はたいして仕事をしているのはむしろ少ない。

ですから、日本人のこうした真心を持ってすれば、たとえ中国や朝鮮でも、その国の真心を持った人としつかり交流できれば、民族関係は随分違ってくるのだと思います。江沢民時代に特に反日教育を受けた人達が今、強烈な反日運動を展開しているわけですが、ある意味それも教育の賜物だと言えるのです。ということは、その逆もまた可能であり、正しい教育を施せば正しい方向に変わります。特に、日本民族の求める徳心とは、人間だれもが生まれながらに備えている直霊であって、罪穢れた人間も祓い清めれば、そこに帰るといふものです。つまり、日本人が日本の和魂ときには荒魂で世界の人々を感化善導し、世界を清め祓い、神武建国の大理想に従い、世界を天のしたに一つの家とすればいいのです。

(了)